



獨協医科大学精神神経医学教室
同門会誌



第10号
2018

目 次

1. 2代目会長に就任して	佐藤勇人	1
2. 下野の国に来て早や15年	下田和孝	2
3. 第10号・特集「私のroutine」		4
	佐藤勇人（特定医療法人社団緑会 佐藤病院）	
	室井秀太（医療法人大田原厚生会 室井病院）	
	清水輝彦（医療法人 清水桜が丘病院）	
	下田和孝（獨協医科大学精神神経医学講座）	
	鮎瀬 武（医療法人桂慈会 菊池病院）	
	高野有美子（獨協医科大学精神神経医学講座）	
	石川高明（医療法人仁和会 埼玉江南病院）	
	篠崎隆央（医療法人清和会 鹿沼病院）	
	竹内祥貴（栃木県立岡本台病院）	
	白木亮祐（栃木県立岡本台病院）	
4. 近況報告	石川高明（医療法人仁和会 埼玉江南病院）	16
5. 研究紹介	尾関祐二（獨協医科大学精神神経医学講座）	18
6. 外来統計および入院統計	藤平明広 岡安寛明	19
7. 教室便り	人事往来	22
	2018年1月現在の教室スタッフ	22
	新入局員挨拶 駒橋はづき 佐々木太郎	23
8. 獨協医科大学・新潟大学対抗戦レポート	石川高明	24
9. 写真で見る講座・大学の動き		25
10. 平成29年度獨協医科大学精神神経医学教室同門会総会議事録		41
11. 2017年の講座業績		42
12. 編集後記		48

2代目会長に就任して

獨協医科大学精神神経医学教室同門会 会長
佐藤 勇 人

酷暑が続き、まさに「うだるような暑さ」の中でこの原稿を作成しております。昨年の長雨も気分がげんなりしますが、この暑さはこたえます。患者さん達の具合も例年よりも悪くなっている印象だし、気のせいかな新患も増えていきますかね。広島カープの独走状態でマジックが点灯して、我が読売ジャイアンツがほぼペナントレースの終戦を迎えたことも、だるさに拍車をかけています。頑張れ高橋由伸！！

改めまして、平成30年4月より黒田会長の後を継いで、同門会会長に就任をいたしました。平成15年の同門会発足より15年目の人事交代となります。

15年の間は様々な事がありました。その中でも我々同門会の力を発揮して迅速に対応できた、東日本大震災と熊本地震での雲雀ヶ丘病院からの患者さんの受け入れとDPAT派遣は、忘れられません。

医局の再興の為に御尽力いただいている下田和孝教授の就任10周年記念祝賀会が開催できた事も、本当によかったと思います。

本年度の新入医局員は5名という大量入局でした。当院にも紅一点の石井沙安也先生をパート派遣していただきました。私自身は9期生で、8期～10期で9人の大量入局者がでた年代です。最近医局へ行く事がありましたが、医局がわいわいがやがやしている感じは昔を思い出しました。医局は、「数は力」という側面もあります。長年下田教授が続けている地道なリクルート活動が実を結んでいますよね。我々病院管理者にとっても医局員が増える事は、栃木県の医師不足に対応していただけの下地があるという事で、とても喜ばしいです。

医師の質もしっかりしていますね。最近岡本台病院を手伝う事があって、医局より派遣されている川俣安史先生と竹内祥貴先生と当直を組みましたが、医療的な知識や技術もしっかりしていて真面目ですね。若い頃の私とは比べものになりません。

2代目会長として大きな抱負を語れる程の私ではありませんが、今後とも会員が気軽に公私ともにつきあえて、いざという時には結束して事に対処できる姿勢を継続して、ますますの発展ができる為に微力ながら努めてまいります。

今年と同門会は東邦大学佐倉病院精神神経医学講座教授の桂川修一先生を招いて、御講演を賜る予定です。講演依頼の為に、鹿沼病院 副院長 駒橋理司先生につきあってもらい酒席をともにしましたが、とても腰が低い先生で、我々も緊張せずに話せました。講演は「楽しく」「為になる」ものとなるでしょう。是非ご参加下さい。

平成30年8月21日

下野の国に来て早や15年 ～escalator yips～

獨協医科大学精神神経医学講座 主任教授
下 田 和 孝

獨協医科大学へ母校・滋賀医科大学から助教授として赴任したのは2003年1月1日であったから、2018年1月で下野の国に来て16年目に入った。月並みな表現であるが、長かったような、あっという間のような不思議な感じである。毎年のことで読者諸氏には、またこいつ言うとするなという向きもおられるかもしれないが、物事には段取り、落語には枕、野球には始球式、というものがあるのでご理解頂きたい。

本誌第1号でも書いた通り、小生は神戸生まれ、岡山県立岡山朝日高等学校卒業まで岡山で過ごした後、1年間大阪府豊中市で予備校通いを余儀なくされた。その後は1977年に滋賀医科大学入学以来、留学期間を除いた約23年を滋賀で過ごした根っからの西日本の人間である。

獨協医科大学赴任当初は関西方面に出張するとなんとも言えない、全身が関西の空気にフィットする感じ、いわゆる、「ほっこり感」があった。それは関西方面の人々の話し言葉、味、匂い、リズムへの同調 (synchronization) の容易さとも言えよう。つまり、まだまだ完全には東の文化に溶け込めていなかったのである。私のモットーは「地域の習慣を知り、地域に溶け込む」ということであり、これまでも、米国・ノースカロライナ大学精神科留学中はcatfish nugget (なまずの唐揚げ) を好物としたし、瑞国・カロリンスカ研究所臨床薬理学教室留学中はsurströmming (強烈な匂いのニシンの缶詰) をaquavitでトライするなど、努力をしてきた。同様に下野の国に来てからは、地域の文化に慣れることに努めたのに潜在意識では、まだまだなじみ方が足りないのかと思っていた。

しかしである。多くの方がご存知であろうが、東日本と西日本ではエスカレーターで立つ位置が異なるとされる。大まかにいえば東日本では左側に立つが、西日本では右側に立つのである。その習慣の境界線は京都と大阪の間に存在する (<http://www.umasugi.com/~h070017/docs/escalator/>) とされる。つまり、シモダの前任地、滋賀は「左立ち」の地域であり、一方、大阪、神戸は「右立ち」の地域なので、いわば関西圏はhybridな地域である。下野の国へ赴任当初は滋賀への帰省時には左に立ち、大阪や神戸などに行ったときには、大阪や神戸の人々のvibrationに乗って苦もなくautomaticに「右側」に立っていた。

ところが、2017年5月だったと思うが、神戸・三宮のエスカレーターで背後からうら若き女性に「おっさん、邪魔なんやけど」と言われたのである。はっと我にかえり、「左側」に立っている自分に気が付いたのである。嗚呼、神戸だと身体が勝手に「右側」に立っていたのに、下野の国に住んで15年でフォームが変わってしまったのだ～～。

この外傷体験があったためか、神戸で開催された2018年6月の第114回日本精神神経学会学術総会、2018年9月の第40回日本生物学的精神医学会・第61回日本神経化学会合同年會に参加した折にも、エスカレーターに乗るときには「右、右、右」と軽く頭の中で唱えるようになり、どこかぎこちない感覚を覚えるようになった。

下野の国に慣れ親しんで手に入れたのは、escalator yipsなのかもしれない。

(注) Yips: イップス (yips) は、精神的な原因などによりスポーツの動作に支障をきたし、突然自分の思い通りのプレー（動き）や意識が出来なくなる症状のことである。本来はゴルフの分野で用いられ始めた言葉だが、現在ではスポーツ全般で使われるようになっている (<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%83%E3%83%97%E3%82%B9>)。



写真左 2018年9月16日JR大阪駅にて撮影
写真右 2018年9月16日JR東京駅にて撮影

私の routine ～浜省と酒に溺れて～

医療法人社団緑会 佐藤病院
佐藤 勇 人

この度のお題は、「私の routine」ということで、routine を電子辞書で調べると「決まってすること 日課 いつもの手順 所定の順序」などの意味が羅列してあります。私のそれを改めて検証してみると、意外と難しいですね（このところ、3年に1回は足を骨折して済生会のお世話になっていますが、これも routine なら恐ろしい）。

年間で必ずすることは、4月～5月で浜田省吾のコンサートにファンクラブを通して申し込んで、10月～12月に行く事が5年以上続いています（運よく当たっています）。私の浜田愛については、同門会誌第5号（2013）に書かせていただきましたので、参照下さい。これによって自分の何が変わるといえば、「パワー」をもらいますね（宗教？）。1952年生まれの浜省は、私とちょうど10年違いで、今年で66才になります。浜省がこんなに頑張っていると思うと、コンサート後の仕事に対する姿勢などが少し変わりますね。今年も11月11日（日）の東京国際フォーラムに、親友の内科医師と浜省好きの出入り業者の奴と行く予定です。11月の佐藤勇人は、少しいつもと違うかもしれません。

もう一つは、やはり「酒」ですね。このところ、routine といっていい程通っているのは、西那須野にある「パイプのけむり Furuya」とその姉妹店で大田原にある「シャムロック」であります。パイプのけむりの古谷マスターは、宇都宮の泉町のパイプのけむりの出身で有名な小川マスターに師事して、20代でお店を開きました。浜省のファンです。彼の客への気配りは微に入り細に入り、常連を大事にしながら新規の客にもきちんと配慮した接客です。明日からでも一流ホテルの支配人が勤まると思えてなりません。シャムロックの郡司マスターは、音楽関係にも詳しくシャムロックに来る若年層を楽しませてくれます。

そこで私が頼むのは、まず本物のライムを使ったジンライム、2杯目はジンとライムを炭酸ソーダで割ったジンリッキーです。燻したナッツがより一層お酒を引き立たせます。3杯目からは、シーバースリーガルのハイボールを頼みます。学生時代に飲めなかった洋酒が、今はリーズナブルな値段で飲めるのはうれしい限りです。大田原の開業医の江部寛先生と古谷マスターが共同で作ったカクテル「江部スペシャル」はとても口あたりよく飲めますが、飲みすぎは要注意のカクテルです。両店ともにフードも充実していることから、店1軒で完結できるところが素晴らしい。

こんなふうに佐藤勇人の夜は暮れていきます。



「パイプのけむりFuruya」の店構え



「パイプのけむりFuruya」 古谷マスター
「シャムロック」 郡司マスター
…県北の夜を熱くする男たち



なぜか？ジンがすき



若き日に思いをはせる
…CHIVAS REGAL



江部スペシャル、旨すぎ!!
レシピは門外不出!!

わたしのroutine色々…

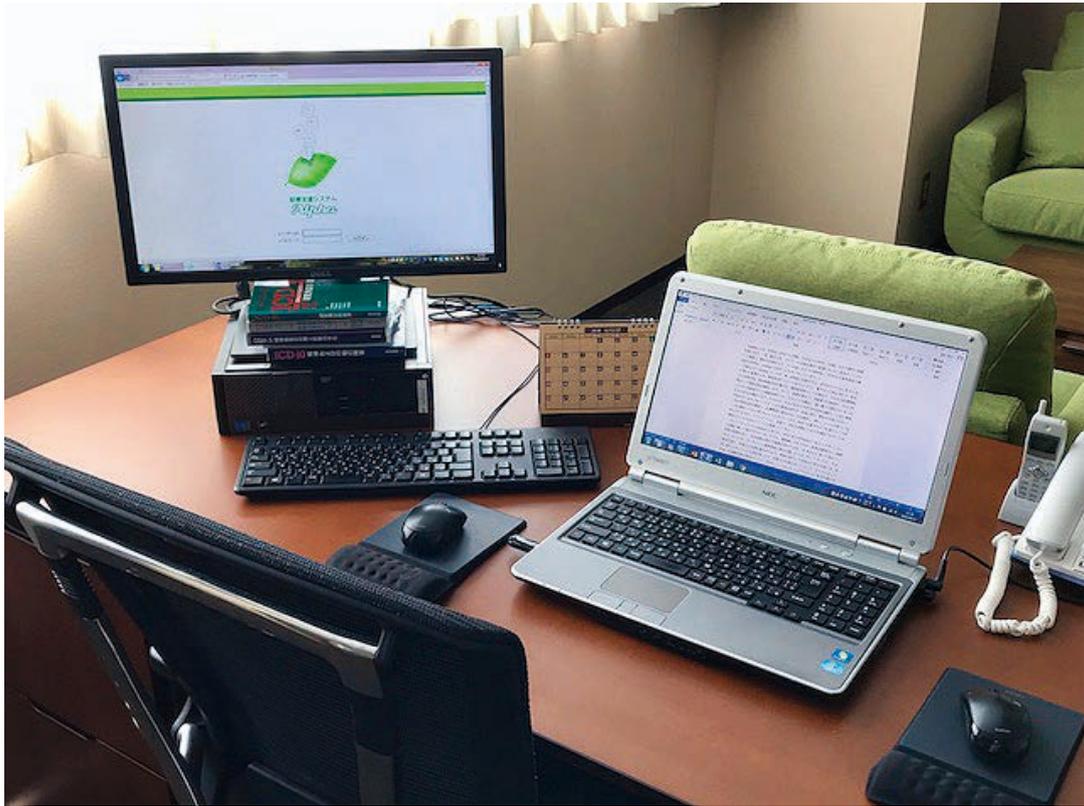
医療法人大田原厚生会 室井病院
室井秀太

routineとは、本来は「決まった手順」「お決まりの所作」「日課」などの意味の英語を指します。一方、最近では、ラグビーの五郎丸選手で話題になった、試合のここぞという場面で、集中力を高めたり、ゲンを担いだりする意味合いで行われる選手独自の儀式的な所作を、routineと呼ぶことも多くなっています。

仕事上でのroutineといえば、朝、8時前に出勤すると、まずはデスク上にある2台のPCの電源を入れ、業務用PCでメールをチェックし、電子カルテ用のPCで、前日の入退院状況、病床稼働状況を確認し、病院経営者としての視点で、その日の診療開始時点での病院状況を確認します。そして、医師の視点で、当直帯での報告や、さらに気になる入院患者さんの看護記録やフローチャートを確認し、朝一番で必要なオーダーがあるか否かを確認します。それから、今日の自分の外来予約状況を確認し、1日の業務予定を立てます。同じことは、1日の業務が終わり、自室に戻り、帰宅する前にも行い、1日の病院状況を確認し、診療業務の漏れがないかを確認し、新しいメールが来ていないかを確認してからPCをシャットダウンします。当院では電子カルテを導入して2年目となりますが、リアルタイムに、自室で、好きな時間にこれらを確認できることは、業務上とても大きなメリットを実感しています。

ライフスタイルでのroutineと言えば、2013年の同門会誌で「私のイチオシ」という投稿で書いた朝夕のウォーキングです。運動嫌いの私ですが、医局在籍時代に、健康診断の結果を見て、生命危機を覚える衝撃を受けて以来、10年以上に渡って続けています。かつては、ダイエットと健康管理に重きを置いたウォーキングでしたが、今は、景色や臭い、気温など五感を働かせながら、季節の移ろいや街並みの変化を楽しみ、途中、新たにオープンした店を覗いたり、本屋で立ち読みをしたりして、ライフスタイルを楽しむ情報収集の機会としたり、余計なノイズをシャットアウトして、自分の頭の中を整理整頓し、思案を巡らすための絶好の機会として、活用しています。また、当直の日や夜の宴会がない時には、子供たちの学校や塾の送迎もroutineの一つです。子供たちも高校生、中学生となり、中々面と向かって話す機会は作りにくくなっていますが、送迎の車中で他愛のない会話をするこも、少しでも父親として接することができる貴重な時間となっています。

私にとってのroutineとは、「限られた時間を有効に活用するためお約束の行動」「ライフスタイルを楽しむためのお作法」といった方が良いかもしれません。



お仕事の朝と夕のroutineに不可欠の2台のPC



気分でウォーキングコースは変わります。お気に入りの一つ蛇尾川河川敷と大田原城址跡

私のroutine

医療法人 清水桜が丘病院
清水輝彦

今年のお題「私のroutine」、私のところでシステム立上げの話はないし、毎朝ヴァイオリンとヴィオラの練習をするわけでもないし、で考えてしまった（ちなみにチェロの神様、パブロ・カザルスは毎朝バッハを奏でるのをroutineとしていたとのこと）。

そんな時に気付いたのが“非日常のroutine”。日々の仕事に追われ、その合間に？娘の相手をして良いパパをこなし、洗濯や食器洗いもこなし（実は大好き）、自分の時間はなかなかない。それゆえ出張は特別な“非日常”なのである。私の好きなこと、音楽が一番だが、同じくらい好きなのが食べること。“美味しい”は当然だが、それ以上に大切なことは人との“出会い”である。“私のroutine”のお店を一応定義すると、『少なくとも10年以上の付き合い、電話で名乗るとすぐに話が通じ連絡先番号など聞かれない、好物をわかっていてお腹の空き具合を伝えるだけでおすすめメニューが出る』である。出張が決まるとまずお店訪問の日程調整、店数の多いところでは昼営業があるかも含めて再チェックし計画を立てる（私は“檀家回り”と言っている）。そして電話、数日前にはご挨拶と予約をする。希望メニューをリクエストすることもあるが、向こうからお薦めを伝えられることも。これで準備万端、そんなで病院を出る私はすでにワクワク〜いつもと表情も違うよう、平静を装うがスタッフには「先生、嬉しそう」と冷やかされてしまう。無事お店に到着したらあとは楽しく美味しい時間を満喫、である。近況報告しながら美味も堪能して・・・翌日の再訪を急遽決めてしまうことも。そんな私を知っている人が“紹介してほしい”と連絡をくれることがある。そんな時は“幸せのお裾分け”ではないがそのお店の商売繁盛と新たな出会いを祈念し快く承諾、時に私が予約の電話を入れてあげることも。こんなご縁が気付いたら10年以上、最長35年以上になっている。中には店主が息子さんに変更ったり、店のオーナーが変わったりも。しかし“続く”のはうれしいこと。番外編だが、その店から独立開業した料理人の店も当然守備範囲、従って“檀家回り”は思っている以上に忙しかったり、ローテーションに気を遣ったり、である。

格調高くもなく、高い精神性もないroutineだが、私を元気にしてくれる“非日常のroutine”は、私にはかけがいのないもの。そんなで“新規開拓”はこのところお休み、である。

私の“Friday routine”

獨協医科大学精神神経医学講座

下田 和孝

私は基本的に早寝早起きである。夜は23時ころには眠くなるし、朝は5時半には起床する。なるべく外食はせず、帰宅後、必ず体重を測定し、夕食後、風呂に入り、少々仕事をこなしてから、23時ころには眠くなるので寝る。朝は概ね5時半には起床し、風呂に入り、食事をする。これは休みの日もあまり変わらない。毎日、規則正しい生活を送っているといえる。

更に我々は週間予定というroutineに従って行動している。

私にとって週間routineの山場は金曜日の再来患者さんの外来である。週によって異なるが、多い時の予約数は60名くらいになる。従って、再診外来のスタートは午前8時としている（獨協医科大学病院のofficialな外来スタート時刻は午前9時）。早起きであるシモダは金曜日は通常午前6時過ぎには大学に到着し、外来に赴き、毎週金曜日に行うroutineを開始するのである。

外来には電子カルテ用などのPC端末、スキャナー、プリンター、ディスプレイ、コピー機など、全部合わせると30数台の機器が設置してある。シモダが外来に赴く時刻にはそれらの機器はまだ眠っている。

シモダの金曜日の朝のroutineはそれらをスイッチをオンにしてすべての機器を叩き起こしていくことである。片っ端からスイッチを入れていくと、チュイーン、クォーン、ヒューン、カタ〜カタカタカタ〜 カサカサ〜、ピ・ピ・ピ・ピ〜と一斉に音を立てはじめる。これ、なかなか快感なのである。機械に命が宿るといえるか、息を吹き返すといえるか、何か生き物のような感じがして健気である。これらの機器が仲間のような気さえてきて、こちらは何故かやる気が出てくるから不思議である。実際に電子カルテなどの機器が機嫌よく動いてくれなければ、全く仕事にならないのだから、これらの機器はやはり「仲間」といわざるを得ない。

そもそも、こういった機器類が正常に稼働するのが当たり前と考える方も多いだろう。しかし、私は、「これらの機器は、今日、現在、たまたまうまく動いているだけ」と思っているのだから、自然とこういうroutineを行い、「そうか、そうか、君たち起動してくれたか」と感謝しているのである。



私のroutine

医療法人桂慈会 菊池病院
鮎 瀬 武

「私のroutine」このお題で執筆依頼を受けた時、あまり聞き慣れない単語だったので、最初に思ったのが「何かあるかな？」ということでした。しかしながら、改めて思い返してみると、私の日常は深い考えのない決まりきった動作の繰り返しだったのだなと反省させられました。そんな訳で、現在の私のroutineを文章に書き起こしたところで何の面白味もないので、今考えてみると、あれは役に立ったroutineだったなと思い出した、大学生時代の思い出のroutineを紹介したいと思います。

大学に入学直後、獨協医科大学にはどこかの部活動に所属しなければならないという決まりがあり、アイスホッケー部に入部しました。アイスホッケーというご存知かもしれませんが、必要な防具が多く、スケートリンクで練習の際は、夜中に部室棟前に部員全員が集合し、大量の防具が入ったバッグを車に乗せてから皆で連れ立って日光まで出かけたものです。ただ、入部して1年以上経過した2年生のとある練習の日、スケートリンクについて、いざ着替えというときにバッグをあけて顔が真っ青。「ヘルメットがない……。」先輩に怒られた上、スケートリンクにも上がれず、3時間くらいの往復時間をかけて何をしに来たのかと、非常にむなしい思いをしたことを思い出します。その出来事をきっかけに、集合前の自宅で防具をバッグに入れる際、足元のスケート靴から頭にかぶるヘルメットにかけて下から上に1つ1つ順番に忘れものがないかを確認する、今となってはいい思い出のroutineが誕生しました。幸いそのroutineをするようになってからは、防具を忘れることは一度もなく、5年生の東医体で無事引退することが出来ました。

出題していただいた方の意向からはずれ、今の生活に全く関係のない個人的な思い出話となってしまいましたが、これを機に今後は現在の生活でも、有益性を主張できるようなroutineを作れるように、日々の生活を見直していきたいと思います。

私のroutine

獨協医科大学精神神経医学講座

高野 有美子

それは「マックのカフェラテMを飲むこと」である。

2016年4月双子の男児を出産した私は、1か月の安静入院、出産後の出血などで、元々なかった筋力がさらに落ちてしまい、階段も登れなかった。3kgの子供が重くてしょうがない。終日パジャマ姿でソファに座って抱っこした。「毎日眠れない当直しているみたいでしょう」と先輩医師に言われたが、「それ以上にきつい」と思う日々だった。

二人ともベッドに寝かせようとするとう泣き、常に抱っこ、3時間ごとのミルクも生真面目に70℃以上のお湯で作り、冷やして飲ませるということをすると、あつという間に次のミルクの時間になる。その間におむつ交換やら沐浴。夫はもちろん、両親や義母にも日参してもらっての子育てだった。

ほぼ引きこもり状態で約1年過ごし、2017年4月保育園入園、大学病院勤務が始まった。

保育園のストックにはおむつ以外に下着、洋服、スタイが3組必要で、それ以外にも毎回セットで持参する。背格好はほぼ同じで、こちらとしては共有でもいいのだが、そういうわけにはいかない。それぞれに名前を書く。そして追いかけて押さえながら体温を測りごはんを食べさせて着替えさせ、やっと車に乗せて出発だ。

通り道にマックが見える。私はいつからかそのカフェラテを頼むことが楽しみになっていた。でも買ってもすぐには飲めない。まずは保育園に送り、おむつやら、歯ブラシやらをそれぞれ指定の場所にセットしないといけない。当然二人分。別れる時に泣いている時もあるが、5分後くらいには泣き止んで遊んでいるとのことだから、そこは振り返らずにさっさと車に戻る。

そしてやっとやっとのカフェラテタイムだ!!!二人が元気に保育園に行けたという安心感と少しばかりの寂しさ、これから仕事だという緊張感の間のわずかな自分だけの時間。母親になれて、子供は可愛い、でも時々しんどい日々で貴重な時間だ。理解ある周囲の方々に感謝し、子供達と出会えたことに感謝し、幸せを噛みしめる15分なのである。

ちなみにマックではパートのおばさん達とたわいもない会話をして、笑顔で「行ってらっしゃい」と言ってもらう。子供達も笑顔でバイバイする。それも元気の源である。

私の朝のroutine

医療法人仁和会 埼玉江南病院
石川高明

「フフン、フフン、フガフガ、フホフホ（起きろ、起きろ、朝だよ、散歩に行こう）」。毎朝決まって5時半に“TINO（ティノ）”に起こされるので私は目覚まし時計をセットする必要がない。TINOは私が飼っている雄のフレンチブルドッグである。TINOの目覚まし時計は人間の都合に合わせてくれることはなく、スヌーズ機能はない。あと10分寝かせてもらえるなんてことはないから起床するしかないのだ。私は完全に目が覚めないうち、TINOに引きずられるようにして朝の散歩に出かける。準備体操する間も与えられず、「早く目を覚ませ！」とでも言わんばかりにTINOはいきなり駆け出す。TINOは体重12キロほどだが、全身筋肉の塊である。日頃から体を鍛えていない私には抵抗する術はなく、TINOに引っぱられながら仕方なく走り出す。走り出した瞬間に私の“やる気スイッチ”が入り、全身の筋肉や神経が働き出すのを感じる。散歩から帰ると空腹を感じて朝食が美味しくなる。そして、気がつけば仕事モードに入っている。明日も5時半に起こされるだろうから、早く眠ることにしよう。私の睡眠覚醒リズムはほとんど乱れることがない。朝ゆっくり寝ていられないし天気が悪い日は大変だが、毎朝の運動が私の健康維持に役立っているとも言える。TINO本人は単に外出したいだけに思えなくもないが、見方を変えれば私のフィジカルトレーナーなのかもしれない。だからTINOには感謝しなければならないし、朝の習慣をこれからも楽しみたい。以上が私のroutineだが、TINOのroutineでもある。



私とTINO

私のroutine

医療法人清和会 鹿沼病院

篠崎隆央

自分の一日の行動を振り返ってみると、routineと言える行動はないように思われます。それこそスポーツのように精神安定が常に重要になるものでなければ、ただの無駄な動作になります。しかし、なくて七癖とも言いまして、おそらく自分では気づかない無駄な動作はあるのだらうとは思っていました。そこで一つ家族に気づかされたものとして、運転中に手をエアコンの吹き出し口にかざす、ということが無意識にやっておりました。もとは、と言うか、夏に汗ばんでくると手のひらに風を当てて乾かしていたものが、そのまま癖になったようです。それをroutineと呼ぶのかはわからないところですが、今のところ分かっているそれらしいものはこれくらいでしょうか。運転関係ではもう一つ、これこそroutineと言うよりは、ただのマニュアル動作のような気がしますが、「決まりきった行動」はあります。それは、エンジンをスタートするときにまずブレーキを踏んで、それからクラッチを踏んで、次にギアをニュートラルにして、その後エンジンスイッチをひねるというものです。エンジンのスタートも、昔は「キーをひねる」でしたが、今はすっかりキーレスが増えましたね。ボタン式のものもあったりして、むしろ昔よりわかりにくくなったような気がします。それはさておき、事故防止のための手順ではありますが、慣れていただけにいつもと違う手順でエンジンをスタートさせると非常に違和感があります。その辺はroutine的な要素ではないかと思えます。我が家には普段私が運転している車のほかにファミリーカーとしてワゴン車もあります。時々こちらを運転することがありますが、実はこの車を買うときにはマニュアル車を探してみましたが、さすがにありませんでしたね。オートマ車なのでクラッチもシフトレバーもないので、エンジンをスタートするときにはやはり毎度違和感があります。サイドブレーキを踏みそうになったり、左手が泳いでしまうこともしばしばです。そういう時に身に染みた習慣、癖があることを実感します。

私のroutine

栃木県立岡本台病院

竹内 祥 貴

岡本台病院に来て初めての夏。ようやくシステムの違う電子カルテにも慣れ、看護師さんたちの顔もわかるようになり、多少なりとも仕事ができる状態になってきたと思う。しかし渡り廊下に羽虫が多いのはまだ慣れない。

さてそんな日々診療に追われ、ADHDの如く、やることを上書きされると初めに何していたかわからなくなるような自分に果たしてroutineはあるのだろうか。困りながらいただいた執筆依頼をもう一度見ると「験担ぎ」でもいいとのこと。験担ぎであれば私には1つ心当たりがある。

岡本台病院に来てから、当直の日に決まって夜勤の看護師さんたちに挨拶するついでに、「今日は面白い人（患者さん）来ないかな？」

と言うようになった。患者さんに対して面白いとは、験担ぎにしてはあまりにも不謹慎だが弁解させていただきたい。面白い人とは、学術的に興味深い病態を持つ人、非常に強烈な個性を持つ人、思わず突っ込まずにはいられないほど不可思議なことを訴える人である。精神科医となって（研修医の頃からだが）最もやりがいを感じるのは、その患者さんの人間味に触れたときである。一口に症状と言っても個性があり、その人の置かれた環境でなければ絶対に思いつかないことを訴える患者さんに出会ったとき面白さを感じるのである。

そしてこのroutineによって当直が荒れても「今日は面白い人に会えた」とコーピングにつながるのである。諦めがつくとも言うが…。本音としては荒れて欲しくはないので、こういうroutineになるのだろうし、こういうところをつくづく自分は素直ではなく、捻くれているなど実感するのである。Routineというより強がりなのだろう。

こんなことを書きながらも、今まさに当直真っ只中である。医局から外をみると、窓に付く羽虫の向こうにちょうど「面白い人」を乗せた民間救急車が見える。果たして今日はどんな「面白い人」に出会うことができるだろうか。

routineとは

栃木県立岡本台病院

白木 亮 祐

同門会誌の執筆依頼が来たのは去年の7月上旬だったでしょうか。そのような依頼を頂いたのは初めてであり（新入局員挨拶を除いて）、どのようなテーマなのか戦々恐々としていたところ、与えられたテーマは「私のroutine」でした。

routine？いきなりどぎついテーマだという印象でした。国語の成績が【かなり】芳しくなく、そんな自分がこんな難しいテーマで執筆できるわけがない！と思いました。そもそも、イチロー選手や五郎丸選手のようなroutineなんて持ち合わせておらず、どう書こうか右往左往しました。最悪、「おいしいカレーの作り方」で書こうとも思いましたが、そんなことしたら、誰に何を言われるかわかったものではなく、渋々断念しました。

何かしらroutineがあるだろうと、一日の生活を振り返ってみましたが、それらしい事柄は見つかりませんでした。そこで、とりあえずroutineについて調べてみよう、と思い、某検索サイトで調べてみたところ、面白い記事を見つけました。

サッカーの遠藤保仁選手の『遠藤保仁が「ルーティン」をもたない深い理由』です。そこで遠藤選手は「僕は昔からルーティンをもったことはありません」と述べています。また、「ルーティンをもってしまうと、それができなかつた場合、リスクのほうが上回ると考えています」とも述べています。

確かに。そう私は思いました。周囲を見渡してみると、routineや決まった手順を損なった時に大きく取り乱してしまう人は結構いるような気がします（もしかしたら、それはroutineではなく、こだわりなのかもしれませんが）。我々の仕事の性質上、予期せぬ出来事も多く、routineが出来ない中でベストパフォーマンスを求められることの方が多いでしょう。もちろんroutineを否定している訳ではありません。しかし、routineにこだわり過ぎるのであれば、持たないのも良いかもしれません。

テーマとは離れた内容になってしまいましたが、これで勘弁してください（笑）

近況報告

医療法人仁和会 埼玉江南病院
石川 高明

(私)「今日も暑いですねー、水分は十分にとっていますか？」

(Aさん)「熱中症にならないようにたっぷり飲んでますよ」

(私)「たっぷりとはどのくらいの量ですか？」

(Aさん)「やかんでざっと3～4個は飲んでます」

(私)「3～4個！？幾らか多いように思いますが」

(Aさん)「だってこの暑さでは飲まずにはいられませんよ、十分な水分補給をするようにニュースでも言っていますし、汗をたくさんかいていますから」

(私)「けいれんや意識が遠のくようなことはないですか？」

以上、夏の診療の一コマですが、これまで20年以上診療をやっても未だに患者さんの生活指導に苦勞することがあります。昨夏は猛暑による熱中症増加が連日報道され、熊谷市では7月に国内最高気温41.1度を記録しました。私が現在勤務している埼玉江南病院は熊谷市にあり、気温が高いことで知られており夏の時期には熱中症対策が必要です。患者さんの中には多飲水が見られることがありますが、熱中症予防として一般的には十分な水分摂取が勧められます。特に暑い時期には普段よりも多めに水分をとって良いのですが、やかん3～4個はさすがに多いと思われる。毎回電解質濃度や薬物血中濃度を調べることはできないし、身体所見だけで適切な飲水量を決められません。こちらが心配していることを患者さんが十分理解できるように伝え、適切で丁度良い生活指導をするのはなかなか難しいものだなあと感じています。患者さんに納得してもらえる丁度良い方法を探りながら日々奮闘しています。

私は10年間の大学病院勤務を経て、平成29年より埼玉江南病院に常勤として勤務しています。昭和35年に開設された294床の精神科病院です。院長は滋賀医科大学精神科初代教授の高橋三郎先生です。高橋先生は昨年米寿を迎えられましたが、変わらず精力的に診療されており、日々頭が下がる思いです。

熊谷市は2019年のラグビーW杯開催地の一つになっています。ご興味のある方、ぜひ遊びに来てください。夏に熊谷市を訪れることがあれば、日本一の暑さを体感できるかもしれません。



高橋三郎先生とのツーショット（埼玉江南病院の正面玄関にて）

研究紹介

獨協医科大学精神神経医学講座 准教授

尾 関 祐 二

今回の「研究紹介」を担当する様にとのお話をいただきまして、具体的なデータや結果の話ではただの総説になってしまいますので、ここでは“研究”の底にある考えを中心に“紹介”したいと思います。

元来から誰も知らないことの答えを見つける、クイズに答えるような感覚が好きで、毎日そんなことしながら生活できればいいなと思っていました。それから時が経って医学部に進学することが決まった時点で、人が何故そのようなことを考えるのか、どうしてそんなことを言ってそんな風に行動するのかをはっきりとした根拠を持って説明することを考えて暮らせるようになることが目標になりました。学問的に表現すれば、自然科学の手法によって人の思考や行動の原理を根本的に説明するということです。後に知ったのですが小林秀雄はこうした考えをベルグソンを引用しつつ厳しく批判しています。まあでも、小林秀雄も神様ではないので、まずはできることをしてみようというところです。それに、こうした目標に立ち向かうことは、困難な状態にある人に役立つ情報をもたらすことになると考えています。そして、そうした考えの延長として、統合失調症という病気ではどうして自我境界がなくなるのか、思考が解体するのかというものに惹かれ、これを自然現象として自然科学の手法で理解できたら良いなと思うようになりました。

実際にはそこから多少「矮小化」するのですが、統合失調症を自然科学的な手法で考えるにはあまりに材料が不足していました。少しでも具体的な足がかりは無いかと考えていたところ、留学先で指導者であった澤先生が、DISC1という遺伝子の働き方を調べる研究をすることになるのでその実働をすることになりました。最終的にDISC1はいわゆる神経の発達に関係していることがわかりました。この遺伝子はある家系の統合失調症患者にだけに認められた染色体転座で切断される遺伝子として報告されたものです。更に全く別の患者で見られた染色体の転座を調べるとセリンの合成に影響を与えていることがわかりまして、今はセリンと統合失調症をひとつのテーマにしています。セリンは神経の発達にも重要な物質です。最近なんとなく見えてきたのは、たぶんセリン合成経路に何らかの変化がある人はいるが、それで統合失調症全てを説明することはできなさそうであるということです。じゃあどう考えるのが良いのか……。こうして考えていると楽しくなってきませんか？他にも不随意運動が強い統合失調症患者などにも注目して、とにかく特徴のある患者を調べることを目的に藤井先生と研究に取り組んでいます。また、向精神薬、精神疾患と心機能についても調べていまして主に岡安先生が行っています。これも元はDISC1が心臓に多く発現していることをきっかけにしています。更に最近は、神経発達症に人の考えや行動を解き明かす手がかりがかなり含まれているのではないかと感じるようになってきています。

研究の基礎にある考えを踏まえた大まかな研究の紹介をしましたが、人それぞれに興味はあります。その興味を自分の手で形にしたいと感じるようであれば相談してもらえればと思います。

平成29年度 外来統計

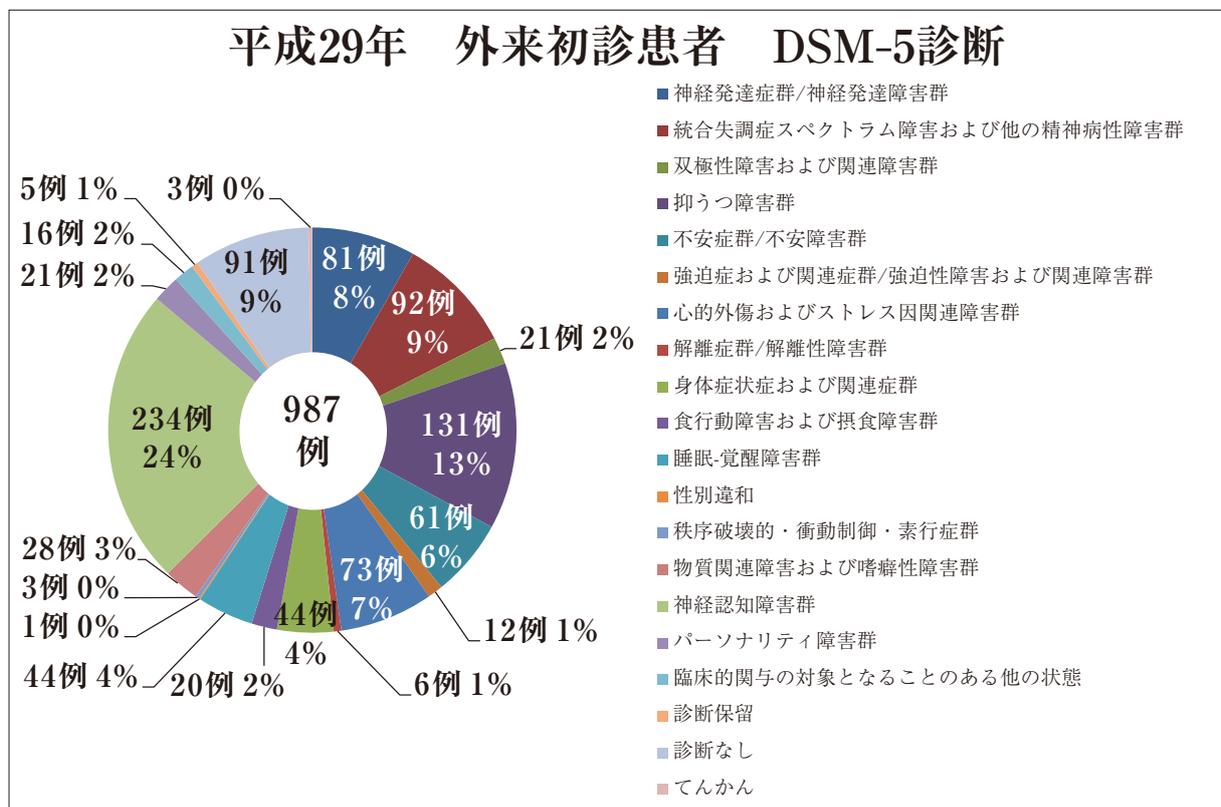
獨協医科大学精神神経医学講座 外来医長
藤 平 明 広

はじめに、各関連病院の先生方には、平素より大変お世話になり誠にありがとうございます。

2017年1月～12月までの新患患者数987名、総再来患者数延べ31911名、一ヶ月平均2659.3名となり、概ね横ばいの値で推移しております。入局希望者が徐々に増えつつありますが、その分外勤で異動、退職される方も多く、見かけよりは依然苦しい体制が続いておりますが、入局員の確保と併行して来年以降も医局員一同、日々努力して参りますのでお含みおきください。

初診患者の内訳は、昨年と見比べてみると大体比率は同じようです。認知症疾患センターを開設していることもあり、例年通り神経認知障害群が全体の1/4と多く占め、以降は気分障害、統合失調症圏、神経発達症群、心的外傷およびストレス因関連障害群（ほとんど適応障害）、不安症群等と続いております。食行動障害・摂食障害群も増えつつあります。「診断なし」は臓器移植等のドナー、レシピエントの精神医学的評価も含んでいます。また、器質因・症状性精神疾患、身体疾患合併例が多く、総合病院である当院の特色と考えております。

平成20年から完全予約制を導入しており、予約が立て込んだ場合は暫しお待ちいただくこともあり、地域の先生方をはじめ諸機関の皆様には大変ご迷惑をおかけ致しております。大学病院精神科の特色を鑑みて、当科での精査加療が望ましいとご判断頂きました患者さまにおきましては、ご紹介頂きますよう何卒よろしくお願ひ申し上げます、可能な範囲で対応致します。



平成29年度 入院統計

獨協医科大学精神神経科 病棟医長
岡 安 寛 明

各関連病院の先生方には、平素より大変お世話になり誠にありがとうございます。

平成29年の入院患者統計について御報告させていただきます。平成29年1月～12月までの入院患者数は173名（男性58名、女性115名、平均年齢 54.6 ± 18.0 歳）でした。内訳としては、従来の気分障害圏（抑うつ障害群と双極性障害及び関連障害群）では39.3%、統合失調症圏が26.0%と前年度と概ね同様の傾向でありました。

当院は総合病院であることから、身体疾患を合併されている症例が入院患者の約70%を占め、必要に応じて当該各診療科への診察を依頼し、身体・精神両面にわたった総合的な治療を行っております。また、自殺企図症例などの救急患者に対しても、救命救急センターと連携して診療にあたり、必要があれば、当科での入院治療を継続しております。さらに、一般身体科病棟への入院患者の精神症状に対して、精神科リエゾンチームによる回診を行い、主科と連携して診療にあたるなど、リエゾン・コンサルテーションにも積極的に取り組んでいます。

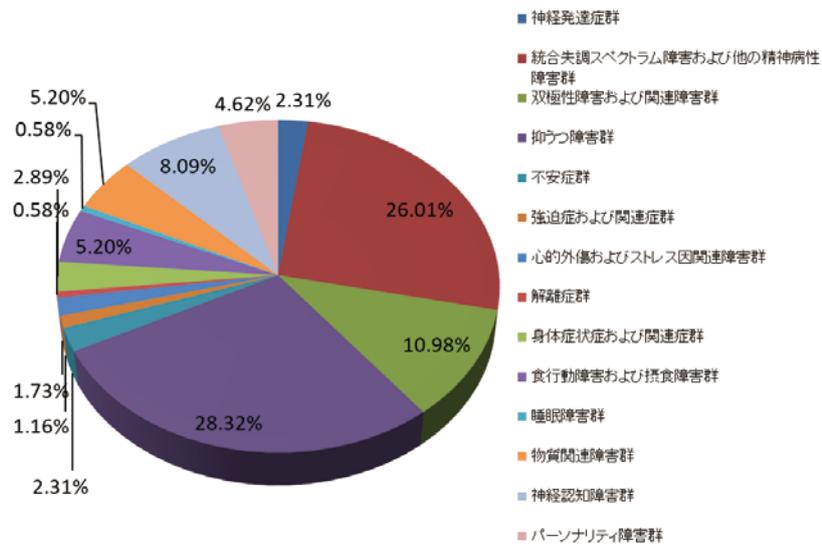
当院では、麻酔科医の協力の下、電気けいれん療法（ECT）を実施しており、平成29年は229件施行しました。また、平成29年3月に、日本総合病院精神医学会の電気けいれん療法研修施設として認定されております。

このように身体合併症があり治療に際して身体科との連携が必要な症例や、ECTが適応となる症例は大学病院精神科が対応していくべきであり、今後も積極的に対応していきたいと考えておりますので、当院での治療が望ましいとご判断頂きました症例は、是非ご紹介いただけますようお願い申し上げます。

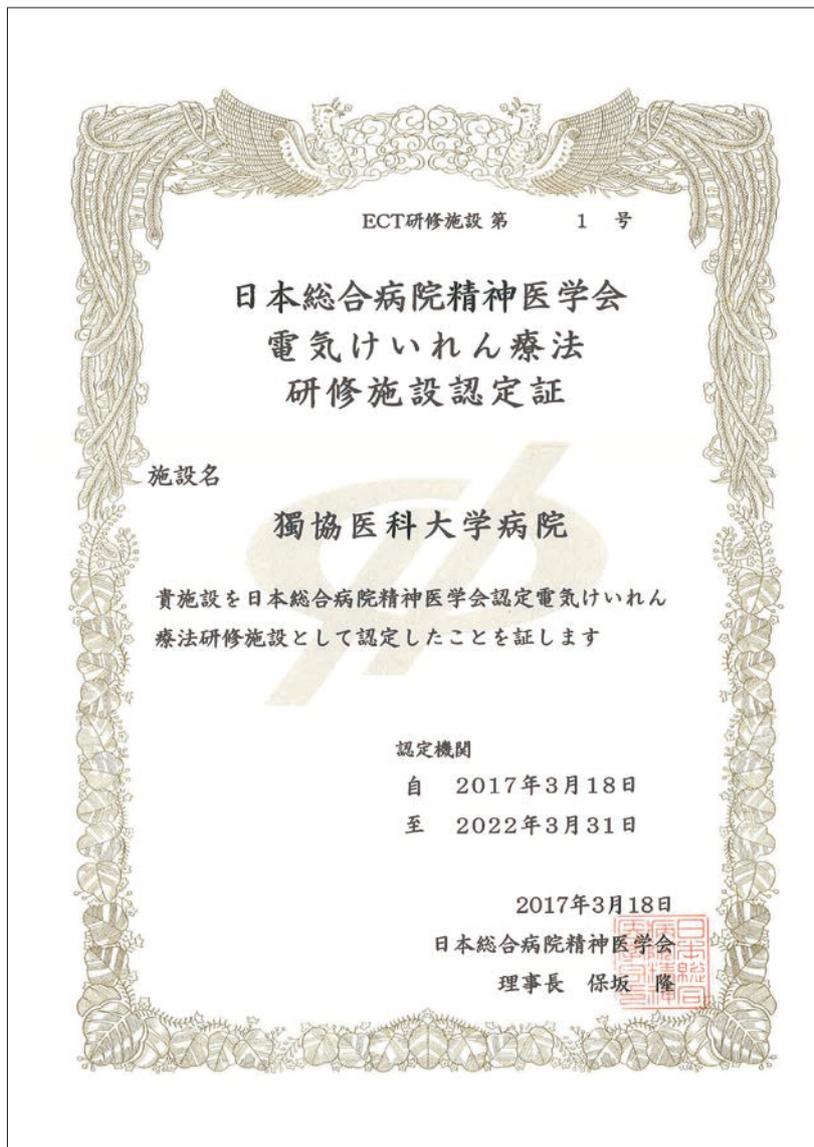
一方で、当院の精神科病棟は開放病棟であり、著しい興奮状態にある急性期の症例を常時受け入れられる環境ではありません。また、当院での急性期治療が終了した後に長期的な継続治療が必要な症例につきまして、当院から転院依頼をさせていただく場合があり、その際には各関連病院の先生方には是非に御協力をいただけると幸いです。

大学病院精神科の特色を生かしつつ、地域の精神科病院の御要望に応えることができるように医局員一同、不断の努力をしていく所存ですので、これまで同様の御支援の程、何卒よろしく願いいたします。

平成29年 入院患者診断分類
(DSM-5)



<ECT研修施設認定証> 施設番号は「第1号」!



人事往来

■2017年度

駒橋はづき	レジデントして採用（2017年4月1日）
佐々木太郎	レジデントして採用（2017年4月1日）
長谷川千絵	鹿沼病院より復帰（2017年4月1日）
高野有美子	室井病院より復帰（2017年4月1日）
篠崎隆央	鹿沼病院に転任（2017年4月1日）
川俣安史	栃木県立岡本台病院に転任（2017年10月1日）
篠崎将貴	栃木県立岡本台病院より復帰（2017年10月1日）

2018年1月現在の講座スタッフ

主任教授	下田和孝
准教授	尾関祐二（医局長）
学内准教授	大曾根 彰、藤井久彌子
講師	渡邊 崇
学内講師	岡安寛明（病棟医長）
学内助教	藤平明広（外来医長）、長谷川千絵、近藤年隆、篠崎将貴、高野有美子、北原亜加利
レジデント	竹内祥貴、白木亮祐、駒橋はづき、佐々木太郎
大学院生（社会人大学院生）	川俣安史、篠崎将貴、儀藤政夫、尾形広行
臨床心理士	小西 徹、新井怜子、袴田リナ
医局秘書	大橋留生
学内講師（派遣）	小杉真一（大澤台病院）、佐伯吉規（がん研有明病院）石川高明（埼玉江南病院）
助教（派遣）	鈴木武士（大平下病院）、上田幹人（滋賀里病院・大津心療内科クリニック）
学内助教（派遣）	室井宏文（室井病院）、鮎瀬 武（菊池病院）、萩野谷真人（日立梅ヶ丘病院）、林 有希（氏家病院）、青木顕子（滝澤病院）、川俣安史（栃木県立岡本台病院）、篠崎隆央（鹿沼病院）、加藤征樹（さくら・ら心療内科）
研究生	佐藤勇人（佐藤病院）、森 和也（佐藤病院）、井上義政
名誉教授	大森健一（滝澤病院）
特任教授	高橋三郎（埼玉江南病院）
非常勤講師	中野隆史（獨協大学）、黒田仁一（栃木県立岡本台病院）、朝日公彦（朝日病院）、朝日晴彦（朝日病院）、駒橋 徹（鹿沼病院）、藤沼仁至（大平下病院）、渡邊昭彦（川村学園女子大学）、室井秀太（室井病院）、岡田正樹（日立梅ヶ丘病院）、石黒 慎（こころの花クリニック）

新入局員挨拶

駒橋 はづき (2017年4月入局 栃木県宇都宮市出身)

平成29年4月に精神神経科に入局させていただきました。研修医時代はなかなか仕事に慣れずに体調を崩すこともありましたが、下田教授を始めとする医局の先生方に助けていただき、何とか復帰することができました。本当に感謝しております。

思えば、医師になることを志した18歳の頃から、ずっと変わらず精神科医になりたいと思っていました。それは、人間の精神的な活動について不思議と面白さを感じる事が多く、興味を惹かれたことが一番の理由ではありましたが、精神科医である祖父や父、叔父の影響も大きかったかもしれません。入局が決まった時には、自分でもとても感慨深いものがありました。

入局後は日々業務に追われ、要領も悪く、なかなか思うように仕事をこなせないこともありますが、私は本当に人の運に恵まれており、周りの皆様に助けていただき、ここまでやってこられたと感じております。今後も、ご迷惑をおかけすることが多いとは思いますが、いただいたご恩を返すべく、一生懸命精進したいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

佐々木 太郎 (2017年4月入局 宮城県仙台市出身)

平成29年4月より獨協医科大学精神神経医学講座の末席を汚しております、佐々木太郎と申します。初期研修医2年間の内、半年近く当医局にはお世話になっておりました。

この場をお借りし、これまで佐々木の不行状にご容赦いただいていた医局先生方には改めて感謝いたします。

自己紹介ということで、紹介いたしますが、基本的に熟考が不得手であり、中長期的な目標を達成することが出来ない性質と考えています。なので、まずは環境に自分を放り込んで、その場で絵を描いていく。そういった人生で、今の今まで生きて参りました。

大学院へ進んだことも、積極的に進学したというよりは、ほぼ受動的な経緯で、進学した後で、「意外と役立つかもな」と後から実感するといった、極めて先見性の乏しい、凡庸な人物です。

周りから見れば、非常に危なっかしい昼行燈と思うでしょうが、全くその通り。弁解の余地もございません。齢も30を迎えることですし、一端の社会人にせめて近づけるように日々精進して参りたいと思っております。えい、えい、おー (関の声)。

～獨協医科大学・新潟大学対抗戦レポート～

獨協医科大学精神神経医学講座 ゴルフ部部長
石川 高明

毎年恒例の新潟大学精神科ゴルフ部との第10回対抗戦（幹事：獨協医科大学）が平成29年11月26日に日光市のサンレイクカントリークラブにて開催されました。新潟大学のメンバーは染矢教授を中心に宮本先生、須貝先生、恩田先生と盤石の体制を整えていました。新潟大学精神科の四天王に対峙する獨協医大は下田教授、林先生、川俣先生、石川の計4名であり、心もとなさを感じる前年と同様のメンバー構成でした。記念すべき第10回大会ということで特別招待選手として日本精神科病院会長の山崎 學先生にもご参加いただきました。

対抗戦前夜には宇都宮で宴会が開かれました。新潟大学の方々ととの宴会はゴルフ同様に毎年楽しいイベントですが、例年前日に楽しみすぎてしまう傾向があります。今年も二次会、三次会と宇都宮の店を巡り、日付が変わって最終的に餃子店にたどり着きました。最後の締めには餃子を食べて、新潟の方々にも宇都宮らしさをいっくらか感じていただけたと思います。

対抗戦当日はコンディションも良く、ラウンドを楽しみました。獨協チーム最高位は川俣先生の3位であり、今回は惨敗してしまいました。山崎会長先生には獨協チームの不甲斐なさをお見せしてしまうことになりました。優勝は3年連続で新潟大学の宮本先生でした。今回のベスグロ(41-41)も染矢教授でしたが、これまでに参加されたすべての対抗戦でベスグロを獲得しております。新潟大学の牙城を崩すのは容易ではありませんが、次回の対抗戦に向けて獨協メンバーが個人レッスンを開始しているようです。すでに次回の対抗戦は11月11日に開催されることが決まっており、第11回戦になります。この「11」が並ぶ対抗戦当日にはこれまでにない大どんでん返しが起こるかもしれません。「11アンダー」は無理だとしても、獨協チームの誰かが「11オーバー」を達成することは夢ではないはず！長年の悲願であった初勝利をつかむためには少なくともメンバー各自がベストスコアを出さなければなりません。次回の対抗戦の結果やいかに。



— 写真で見る講座・大学の動き —



第15回栃木こころの絵画・書道展
(栃木県総合文化センター、宇都宮、2017年2月15-16日)



佐々木太郎先生、入局直前の講演三連闘。栃木県精神医学会・栃木気分障害研究会、からのMeiji Seikaファルマ主催 栃木県精神科医療フォーラム、からの東京精神医学会学術集会。
(写真左：第70回 栃木県精神医学会・第35回 栃木気分障害研究会、宇都宮、2017年3月4日
写真右：第109回 東京精神医学会学術集会、東京、2017年3月11日)



「いきなり部屋飲み企画」に戸惑う大森健一先生（獨協医科大学名誉学長・名誉教授、医療法人 至誠会 滝澤病院理事長）と下田和孝主任教授
(2016年度医局旅行、木更津・籠宮城、2017年3月18日)



いかなるシチュエーションでも楽しく酌する佐々木太郎先生
(2016年度医局旅行、木更津・籠宮城、2017年3月18日)



最終的にはいつもの部屋飲み
(2016年度医局旅行、木更津・籠宮城、2017年3月18日)



下田和孝主任教授 就任10周年祝賀会
(宇都宮東武ホテルグランデ、宇都宮、2017年6月3日)



青木公平先生（財団法人栃木県精神衛生協会・会長）、
高橋三郎先生（医療法人仁和会 埼玉江南病院・理事長）のご挨拶
（下田和孝主任教授就任10周年祝賀会、宇都宮東武ホテルグランデ、宇都宮、2017年6月3日）



山田尚登先生（滋賀医科大学副学長（現・医療法人 杏嶺会 上林記念病院院長））、
山崎 學先生（公益社団法人 日本精神科病院協会会長）、染矢俊幸先生（新潟大学大学院医歯学総合研究科
感覚統合医学講座（精神医学分野）教授（現・新潟大学医学部長））のご挨拶
（下田和孝主任教授就任10周年祝賀会、宇都宮東武ホテルグランデ、宇都宮、2017年6月3日）



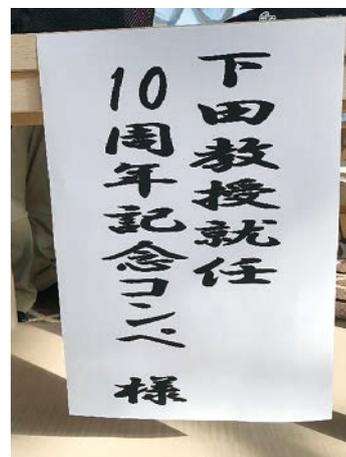
石田展弥先生（医療法人明和会琵琶湖病院理事長）のご挨拶
（下田和孝主任教授就任10周年祝賀会、宇都宮東武ホテルグランデ、宇都宮、2017年6月3日）



Kazzfest乱入！！爆音に耳をふさぐ大森健一先生（獨協医科大学名誉学長・名誉教授、医療法人 至誠会 滝澤病院理事長）と高橋三郎先生（医療法人仁和会 埼玉江南病院・理事長）
（下田和孝主任教授就任10周年祝賀会、宇都宮東武ホテルグランデ、宇都宮、2017年6月3日）



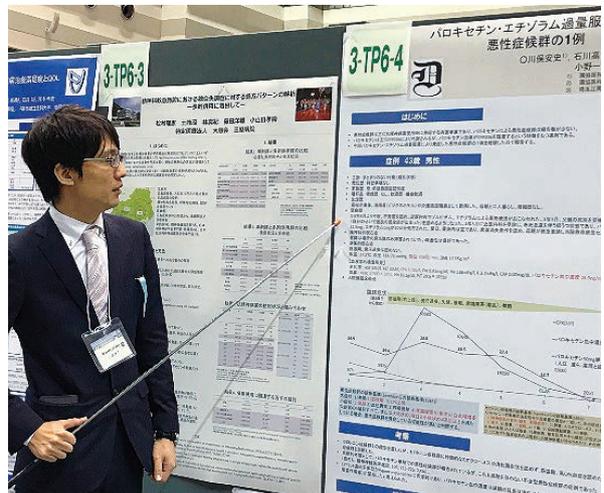
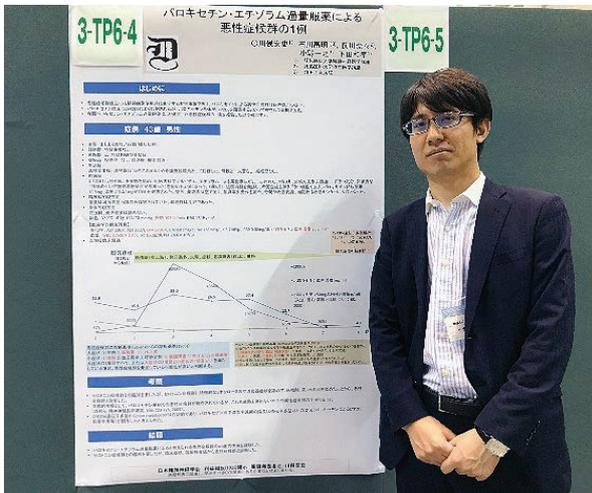
下田和孝主任教授就任10周年祝賀会
（宇都宮東武ホテルグランデ、宇都宮、2017年6月3日）



下田和孝主任教授就任10周年記念コンペ
（Sun Hills Golf & Resort、宇都宮、2017年6月4日）



掘 輝先生（産業医科大学精神医学教室）のご講演「静と動」
（第7回Dokkyo Psychiatry club、壬生、2017年6月5日）



川俣安史先生ご発表
（第113回日本精神神経学会学術総会、名古屋、2017年6月22-24日）



医局・病棟・外来合同納涼会。医局旅行同様、大森健一先生（獨協医科大学名誉学長・名誉教授、
医療法人 至誠会 滝澤病院理事長）は必ずご出席。
（宇都宮グランドホテル、宇都宮、2017年7月3日）



新井平伊先生（順天堂大学医学部精神医学講座・教授）のご講演
 （平成29年度獨協医科大学認知症疾患医療センター講演会、壬生、2017年8月26日）

DOKKYO K-ON PRESENTS

PROF SHIMODA 100年演奏会

祝！還暦+結婚30周年+主任教授就任10周年

PROF
KAZUTAKA
SHIMODA

SPECIAL GUEST
直訳ロック
王様

100th Anniversary
Special Live

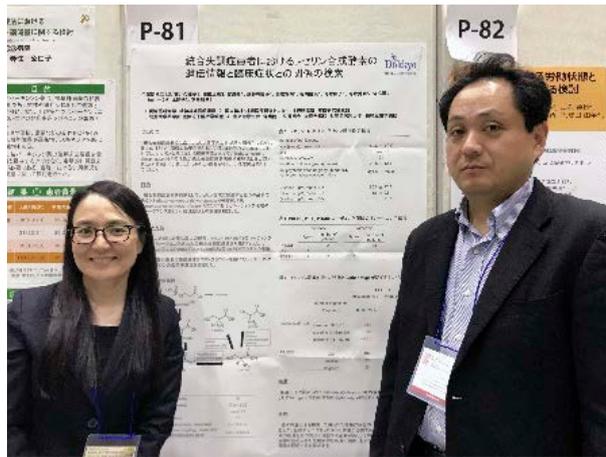
TIME SCHEDULE

15:00-15:30	Kazzfest ver Char
15:30-16:00	Aqua Tsim
16:00-16:30	Tuul
16:30-17:00	the pluto
17:00-17:30	Black Pearl
17:30-18:30	Special Guest 「直訳ロックの王様」with Kazzfest

2017年9月3日 SUN
 OPEN 14:30 START 15:00
 LIVE CHARGE FREE DONATION ¥500

AT HARD ROCK HOUSE
宇都宮市下平出町650-3
028-662-3331

下田和孝主任教授就任10周年+還暦+結婚30周年記念演奏会
 （Hard Rock House, 宇都宮、2017年9月3日）



藤井久彌子准教授、尾関祐二准教授。札幌ではおきまりのジンギスカン
 (第39回日本生物学的精神医学会・第47回日本神経精神薬理学会合同年会、札幌、2017年9月28-30日)



渡邊 崇講師、下田和孝主任教授
 (第39回日本生物学的精神医学会・第47回日本神経精神薬理学会合同年会、札幌、2017年9月28-30日)



シンポジウムで講演中の渡邊 崇講師 (写真左)。左から金澤徹文先生 (大阪医科大学)、
 筈田泰誠先生 (理化学研究所)、渡邊 崇講師、加藤正樹先生 (関西医科大学)、
 池田匡志先生 (藤田保健衛生大学 (現・藤田医科大学))、齋藤竹生先生 (藤田保健衛生大学 (現・藤田医科大学))
 (第39回日本生物学的精神医学会・第47回日本神経精神薬理学会合同年会、札幌、2017年9月28-30日)



いつも通り山本恭司師匠を真似てみた
 (米子鬼太郎空港、米子、2017年11月1日)



左から篠崎将貴先生、下田和孝主任教授、藤井久彌子准教授、尾関祐二准教授
 (第27回日本臨床精神神経薬理学会、松江、2017年11月2-3日)



発表中の篠崎将貴先生
(第27回日本臨床精神神経薬理学会、松江、2017年11月2-3日)



「北ホテル」熱唱中の堀口 淳先生（島根大学医学部精神医学講座・教授）
(第27回日本臨床精神神経薬理学会、松江、2017年11月2-3日)



入局決意表明5人組

(上段左から横山宜史先生、石井沙安也先生、佐藤由英先生、北林佳晃先生、大和田 環先生)



山崎 學先生 (公益財団法人 日本精神科病院協会会長) とどちらが早くfacebookに投稿するかを競う (写真左・中)。

左から山崎 學先生、下田和孝主任教授、
山田尚登先生 (滋賀医科大学副学長 (現・医療法人 杏嶺会 上林記念病院院長))
(琵琶湖カントリークラブ、栗東、2017年11月11日)



発表中の篠崎将貴先生
(第112回東京精神医学会、東京、2017年11月18日)



Katja Kölkebeck先生 (University of Münster) による講演
(壬生、2017年11月20日)



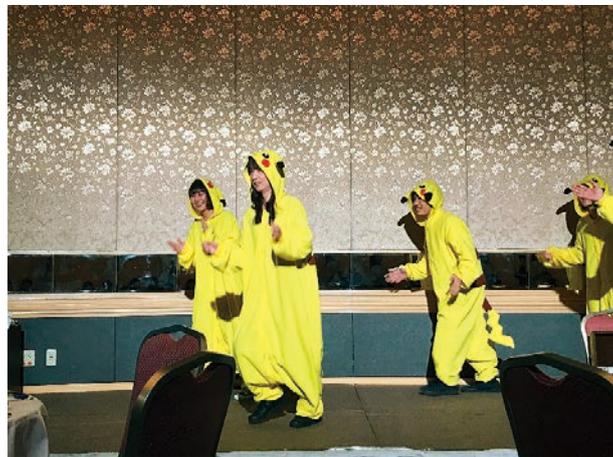
佐藤勇人先生 (医療法人社団 緑会 佐藤病院理事長) の次期同門会長ご就任のご挨拶
(2017年度獨協医科大学精神神経医学講座同門会総会、宇都宮東武ホテルグランデ、宇都宮、2017年12月2日)



山之内芳雄先生（国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター）によるご講演
（2017年度獨協医科大学精神神経医学講座同門会総会、宇都宮東武ホテルグランデ、宇都宮、2017年12月2日）



大森健一先生（獨協医科大学名誉学長・名誉教授、医療法人 至誠会 滝澤病院理事長）、
下田和孝主任教授のご挨拶
（2017年度獨協医科大学精神神経医学講座同門会・精神科合同忘年会、宇都宮東武ホテルグランデ、2017年12月2日）



医局員による出し物
（2017年度獨協医科大学精神神経医学講座同門会・精神科合同忘年会、宇都宮東武ホテルグランデ、2017年12月2日）



「ブルゾン・ち〇み」と言わないとわからないところが悲しい
(2017年度獨協医科大学精神神経医学講座同門会・精神科合同忘年会、宇都宮東武ホテルグランデ、2017年12月2日)



参列者の皆様方
(2017年度獨協医科大学精神神経医学講座同門会・精神科合同忘年会、宇都宮東武ホテルグランデ、2017年12月2日)



2017年度宮坂賞は川俣安史先生に授与された
(2017年度獨協医科大学精神神経医学講座同門会・精神科合同忘年会、宇都宮東武ホテルグランデ、2017年12月2日)



黒田仁一先生（栃木県立岡本台病院院長、獨協医科大学精神神経医学講座同門会会長）の閉会のご挨拶
（2017年度獨協医科大学精神神経医学講座同門会・精神科合同忘年会、宇都宮東武ホテルグランデ、2017年12月2日）



忘年会会場でBassの神様、桜井哲夫氏に遭遇
（2017年度獨協医科大学精神神経医学講座同門会・精神科合同忘年会、宇都宮東武ホテルグランデ、2017年12月2日）



嶽北佳輝先生（関西医科大学精神神経科学講座）のご講演。これも「静と動」
（第8回Dokkyo Psychiatry club、壬生、2017年12月4日）



シンポジウム座長の古郡規雄先生（弘前大学神経精神医学講座）と渡邊 崇講師
（第38回日本臨床薬理学会、横浜、2017年12月6-8日）



第13回日韓臨床薬理シンポジウム
（第38回日本臨床薬理学会、横浜、2017年12月6-8日）



日本臨床薬理学会vs 大韓民国臨床薬理学会 ゴルフ対決
（米原ゴルフ倶楽部、市原、2017年12月8日）



2017年10月 獨協医科大学精神神経医学講座集合写真

平成29年 獨協医科大学精神神経科教室同門会総会次第議事録

平成29年12月2日 於：宇都宮東武ホテルグランデ

当日18人の出席、54名からの委任状により総会開催となりました。下記のように議事進行されました。

1、会長挨拶 黒田仁一会長

2、議 事

(1) 平成28-29年 (H28.12. - H29.11.) 事業報告

1、同門会総会・記念講演会開催 平成28年12月10日 於：宇都宮東武ホテルグランデ
記念講演会 『今後の精神科専門医制度の動向』
医療法人愛精会あいせい紀年病院
理事長 森 隆夫 先生

2、平成28-29年 宮坂賞表彰 平成28年12月10日 於：宇都宮東武ホテルグランデ
受賞者 藤平 明広 先生 (獨協医科大学精神神経医学講座)

3、同門会誌 第9号 発行 平成29年1月

4、会員名簿発行 平成29年1月

5、平成29-30年 宮坂賞選考 平成29年10月
受賞者 川俣 安史 先生 (獨協医科大学精神神経医学講座)
受賞理由：Shaken baby syndromeの研究を精力的に進めているため

(2) 平成28-29年決算報告 (詳細は略させていただきます。)

(3) 平成29-30年 (H29.12. - H30.11.) 事業計画

1、同門会総会・記念講演会開催 平成29年12月2日 於：宇都宮東武ホテルグランデ
記念講演会 『新しい精神保健指定医制度について』
国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 所長補佐
精神保健計画研究部 部長 山之内 芳雄 先生

2、平成29-30年 宮坂賞表彰 平成29年12月2日 於：宇都宮東武ホテルグランデ
受賞者 川俣 安史 先生 (獨協医科大学精神神経医学講座)

3、同門会誌 第10号 発行 平成31年1月予定

4、会員名簿発行 平成31年1月予定

5、平成30-31年 宮坂賞選考

(4) 平成29-30年予算案 (詳細は略させていただきます。)

(1) ~ (4) について、会計責任者、監事などからの説明があり承認されました。

(5) 平成29-30年 (H29.12.-H30.11.) 役員改選があり下記の先生方に決まりました。

会 長 佐藤勇人

世話人 下田和孝 斎藤 治 藤沼仁至 朝日晴彦 松村 茂 岡安寛明

監 事 駒橋 徹 室井秀太

以上にて、無事総会が終了しました。

— 2017年の講座業績 —

獨協医科大学神経医学講座 主任教授
下田 和 孝

■2017年の業績

<英文原著>

Watanabe T, Ishiguro S, Aoki A, Ueda M, Hayashi Y, Akiyama K, Shimoda K.

1019C/G (rs6295) promoter polymorphism of the 5-HT1A receptor G/G genotype is associated with panic disorder: an association study in a Japanese population

Psychiatry Investigation 2017 Jan;14(1):86-92. doi: 10.4306/pi.2017.14.1.86. Epub 2016 Dec 29.

Watanabe T, Ueda M, Ishiguro S, Hayashi Y, Aoki A, Shinozaki M, Kato K, Akiyama K, Shimoda K.

Early improvement and marriage are determinants of the 12-month treatment outcome of paroxetine in outpatients with panic disorder

Clinical Psychopharmacology and Neuroscience 15(4):382-390. 2017. doi: 10.9758/cpn.2017.15.4.382.

Saito S, Fujii K, Ozeki Y, Ohmori K, Honda G, Mori H, Kato K, Kuroda J, Aoki A, Asahi H, Sato H, Shimoda K, Akiyama K.

Cognitive function, treatment response to lithium, and social functioning in Japanese patients with bipolar disorder.

Bipolar Disorder. 2017 Nov;19(7):552-562. doi: 10.1111/bdi.12521. Epub 2017 Jul 10.

Amare AT, Schubert KO, Hou L, Clark SR, Papiol S, Heilbronner U, Degenhardt F, Tekola-Ayele F, Hsu YH, Shekhtman T, Adli M, Akula N, Akiyama K, Ardaur R, Arias B, Aubry JM, Backlund L, Kumar A, Bellivier BF, Benabarre A, Bengesser S, Biernacka JM, Birner A, Brichant-Petitjean C, Cervantes P, Chen HC, Chillot Ci, Cichon S, Colom F, Cruceanu C, Czerski PM, Dalkner N, Dayer A, Zompo MD, DePaulo JR, Étain B, Falkai P, Forstner AJ, Frisen L, Frye MA, Fullerton JM, Gard S, Garnham JS, Goes FS, Grigoriou-Serbanescu M, Grof P, Hashimoto R, Hauser J, Herms S, Hoffmann P, Hofmann A, Jamain S, Jiménez E, KahnJP, Kassem L, Kato T, Kelsoe J, Kittel-Schneider S, Kliwicky S, König B, Kusumi I, Laje G, Landén M, Lavebratt C, Leboyer M, Leckband SG, Maj M, Manchia M, Martinsson L, McCarthy MJ, McElroy S, Mitchell PB, Mitjans M, Mondimore FM, Monteleone P, Nievergelt CM, Nöthen MM, Novák T, O' Donovan C, Ozaki N, Ösby U, Pfennig A, Potash JB, Reif A, Reininghaus E, Rouleau GA, Rybakowski JK, Schalling M, Schofield PR, Schweizer BW, Severino G, Shilling PD, Shimoda K, Simhandl C, CSlane CM, Squassina A, Stamm T, Stopkova P, Tortorella A, Turecki G, Vieta E, Veeh J, Witt S, Wright A, Zandi PP, Bauer M, Alda M, Rietschel M, FMcMahon FJ, Schulze TG, Baune BT.

A polygenic score for Schizophrenia and HLA and inflammation genes predict response to lithium in Bipolar Affective Disorder

JAMA Psychiatry. 2018 Jan 1;75(1):65-74. doi: 10.1001/jamapsychiatry.2017.3433.

Sugawara N, Maruo K, Sugai T, Suzuki Y, Ozeki Y, Shimoda K, Someya T, Yasui-Furukori N.

Prevalence of underweight in patients with schizophrenia: A meta-analysis

Schizophrenia research 195:67-73, 2018. doi: 10.1016/j.schres.2017.10.017. Epub 2017 Oct 17.

Sugawara N, Sagae T, Yasui-Furukori N, Yamazaki M, Shimoda K, Mori T, Sugai T, Matsuda H, Suzuki Y, Ozeki Y, Okamoto K, Someya T.

Effect of nutritional education on weight change and metabolic abnormalities among patients with schizophrenia in Japan: A randomized controlled trial

Journal of Psychiatric Research, 2018 Feb;97:77-83. doi: 10.1016/j.jpsychires.2017.12.002. Epub 2017 Dec 5.

<和文総説>

篠崎将貴、渡邊 崇、下田和孝

ファーマコジェノミクス

分子精神医学 17(1): 48-50, 2017

儀藤政夫、井原 裕、尾形広行、大戸佑二、永井敏郎、下田和孝

Prader-Willi症候群の食行動

精神医学 59: 475-482, 2017

藤井久彌子、尾関祐二、下田和孝

高齢者に対する薬物療法

臨床精神薬理 20: 1103-1112, 2017

佐伯吉規

緩和ケア口伝 現場で広がるコツとご法度 ケミカルコーピングにどう対応できるか—精神科医の立場から

緩和ケアプラス 2: 191-192, 2017

<その他>

川俣安史、尾関祐二、下田和孝

精神疾患にビタミンB12は有効か知りたい

臨床精神薬理 20: 207-208, 2017

渡邊 崇、下田和孝

Pregabalinに気分安定作用があるか?

臨床精神薬理 20: 437-438, 2017

萩野谷真人、大曾根 彰、下田和孝

Memantineに気分安定作用があるのか?

臨床精神薬理 20: 694-696, 2017

竹内祥貴、尾関祐二、下田和孝

COPD患者へのベンゾジアゼピン系薬剤使用について

臨床精神薬理 20: 923-925, 2017

渡邊 崇、下田和孝

抗うつ薬の自殺関連事象は治療初期に起こりやすいか?

臨床精神薬理 20: 1181-1182, 2017

萩野谷真人、大曾根 彰、下田和孝

軽度認知障害 (MCI) に有効な薬物治療はあるか?

臨床精神薬理 20: 1476-1480, 2017

<国際学会発表>

Ozeki Y, Sekine M, Fujii K, Watanabe T, Okayasu H, Takano Y, Shinozaki T, Aoki A, Mori H, Akiyama K, Honma H, Shimoda K.

Relationship between peripheral amino acid concentration and diagnosis and severity using equation modeling analysis

15th International congress of research on schizophrenia, March 24-28, 2017 San Diego, USA

Watanabe T, Inoue Y, Hayashi Y, Pierce J, Aoki A, Ishiguro S, Ueda M, Akiyama K, Tsuchimine S, Yasui-Furukori N, Shimoda K.

Pharmacokinetics of mirtazapine included glucuronidated metabolites in Japanese psychiatric patients

5th Asian College of Neuropsychopharmacology, April 27-29, 2017, Bali, Indonesia

<国際学会シンポジウム>

Yasui-Furukori N, Sugawara N, Yamazaki M, Shimoda K, Mori T, Sugai T, Matsuda H, Suzuki Y, Minami Y, Ozeki Y, Okamoto K, Sagae T, Someya T.

Difference in recognition of metabolic adverse events between psychiatrists and patients with schizophrenia in Japan

5th Asian College of Neuropsychopharmacology, April 27-29, 2017, Bali, Indonesia

Sugawara N, Sagae T, Yasui-Furukori N, Yamazaki M, Shimoda K, Mori T, Sugai T, Matsuda H, Suzuki Y, Ozeki Y, Okamoto K, Someya T.

Can nutrition; education improve obesity weight among patients with schizophrenia?

5th Asian College of Neuropsychopharmacology, April 27-29, 2017, Bali, Indonesia

Sugai T, Suzuki Y, Yamazaki M, Shimoda K, Mori T, Ozeki Y, Matsuda H, Sugawara N, Yasui-Furukori N, Okamoto K, Sagae T, Someya T.

Physical risks in Japanese patients with schizophrenia: From a nationwide survey

5th Asian College of Neuropsychopharmacology, April 27-29, 2017, Bali, Indonesia

<国内学会シンポジウム>

佐伯吉規

せん妄マネジメントの極意—意思決定能力の欠如に基づく倫理的問題—

第113回日本精神神経学会学術総会、2017年6月22-24日、名古屋

下田和孝

ワークショップ 精神科 アリピプラゾール投与中に横紋筋融解症を呈した統合失調症の一例

第8回アプライドセラピューティクス（実践薬物治療）学会 第2回日本臨床薬理学会 関東甲信越地方会、2017年9月9-10日、横浜

渡邊 崇、井上義政、林 有希、青木颯子、石黒 慎、上田幹人、篠崎将貴、秋山一文、下田和孝

薬物動態学からの抗うつ薬治療のイノベーション

第39回生物学的精神医学会 第47回日本神経精神薬理学会、2017年9月28-30日、札幌

須貝拓朗、鈴木雄太郎、山崎 學、森 隆夫、松田ひろし、菅原典夫、古郡規雄、下田和孝、尾関祐二、岡本呉賦、寒河江豊昭、染矢俊幸

シンポジウム 精神科薬物治療の身体リスクを考える—統合失調症患者さんの命と健康を守るために—

日本における統合失調症患者の身体リスクについて

第6回日本精神科医学会、2017年10月12-13日、広島

菅原典夫、古郡規雄、山崎 學、下田和孝、寒河江豊昭、森 隆夫、須貝拓朗、松田ひろし、鈴木雄太郎、尾関祐二、岡本呉賦、染矢俊幸

シンポジウム 精神科薬物治療の身体リスクを考える—統合失調症患者さんの命と健康を守るために—
統合失調症患者のメタボリック症候群を予見する

第6回日本精神科医学会、2017年10月12-13日、広島

鈴木雄太郎、須貝拓朗、山崎 學、下田和孝、森 隆夫、尾関祐二、松田ひろし、岡本呉賦、寒河江豊昭、菅原典夫、古郡規雄、染矢俊幸

シンポジウム 精神科薬物治療の身体リスクを考える—統合失調症患者さんの命と健康を守るために—
抗精神病薬多剤併用大量療法が統合失調症患者の心電図QT間隔に与える影響

第6回日本精神科医学会、2017年10月12-13日、広島

染矢俊幸、須貝拓朗、鈴木雄太郎、森 隆夫、松田ひろし、菅原典夫、古郡規雄、下田和孝、尾関祐二、岡本呉賦、寒河江豊昭、山崎 學

シンポジウム 精神科薬物治療の身体リスクを考える—統合失調症患者さんの命と健康を守るために—
「抗精神病薬治療と身体リスク」に関する提言

第6回日本精神科医学会、2017年10月12-13日、広島

須貝拓朗、鈴木雄太郎、山崎 學、森 隆夫、松田ひろし、菅原典夫、古郡規雄、下田和孝、尾関祐二、岡本呉賦、寒河江豊昭、染矢俊幸

シンポジウム 精神科薬物治療の身体リスクを考える—統合失調症患者さんの命と健康を守るために—
日本における統合失調症患者の身体リスクについて

第27回日本臨床精神神経薬理学会、2017年11月2-3日、松江

菅原典夫、古郡規雄、山崎 學、下田和孝、寒河江豊昭、森 隆夫、須貝拓朗、松田ひろし、鈴木雄太郎、尾関祐二、岡本呉賦、染矢俊幸

シンポジウム 精神科薬物治療の身体リスクを考える—統合失調症患者さんの命と健康を守るために—
統合失調症患者のメタボリック症候群を予見する

第27回日本臨床精神神経薬理学会、2017年11月2-3日、松江

鈴木雄太郎、須貝拓朗、山崎 學、下田和孝、森 隆夫、尾関祐二、松田ひろし、岡本呉賦、寒河江豊昭、菅原典夫、古郡規雄、染矢俊幸

シンポジウム 精神科薬物治療の身体リスクを考える—統合失調症患者さんの命と健康を守るために—
抗精神病薬多剤併用大量療法が統合失調症患者の心電図QT間隔に与える影響

第27回日本臨床精神神経薬理学会、2017年11月2-3日、松江

染矢俊幸、須貝拓朗、鈴木雄太郎、森 隆夫、松田ひろし、菅原典夫、古郡規雄、下田和孝、尾関祐二、岡本呉賦、寒河江豊昭、山崎 學

シンポジウム 精神科薬物治療の身体リスクを考える—統合失調症患者さんの命と健康を守るために—
「抗精神病薬治療と身体リスク」に関する提言

第27回日本臨床精神神経薬理学会、2017年11月2-3日、松江

<国内学会発表>

佐々木太郎、岡田春告、倉沢和宏、近藤年隆、藤平明広、岡安寛明、下田和孝
ANCA関連血管炎に対してステロイド投与後、幻聴・注察妄想が出現した1例
第70回栃木県精神医学会・第35回栃木気分障害研究会、2017年3月4日、宇都宮

佐々木太郎、岡田春告、倉沢和宏、近藤年隆、藤平明広、岡安寛明、下田和孝
ANCA関連血管炎に対してステロイド投与後、幻聴・注察妄想が出現した1例
第2回栃木県精神科医療フォーラム、2017年3月6日、壬生

佐々木太郎、岡田春告、倉沢和宏、近藤年隆、藤平明広、岡安寛明、下田和孝
ANCA関連血管炎に対してステロイド投与後、幻聴・注察妄想が出現した1例
第109回東京精神医学会、2017年3月11日、東京

川俣安史、渡邊 崇、宇塚岳夫、金 彪、下田和孝
パニック障害と診断され向精神薬が多剤併用されていた脳腫瘍患者症例の検討
下都賀郡市医師会学術講演会、2017年3月14日、栃木

大曾根 彰
レビー小体型認知症の縦断的経過
第12回とちぎ認知症研究会、2017年3月17日、栃木

川俣安史、石川高明、前川奈々、小野一之、下田和孝
パロキセチン・エチゾラム過量服薬による悪性症候群の1例
第113回日本精神神経学会学術総会、2017年6月22日-24日、名古屋

駒橋はづき、竹内祥貴、近藤年隆、長谷川千絵、岡安寛明、下田和孝
うつ病と血管性認知症の鑑別に苦慮した一例
第3回栃木県精神科医療フォーラム、2017年9月13日、下野

尾関祐二、関根正恵、藤井久彌子、高野有美子、岡安寛明、篠崎隆央、渡邊 崇、青木顕子、青木秀明、森 玄房、
秋山一文、本間 浩、下田和孝
統合失調症患者におけるL-セリン合成系の評価
第39回生物学的精神医学会、第47回日本神経精神薬理学会、2017年9月28-30日、札幌

秋山一文、尾関祐二、藤井久彌子、渡邊 崇、下田和孝、本田 暁、森 玄房
統合失調症認知機能簡易評価尺度（BACS）を用いた認知機能評価-6年後の再検査と社会機能評価尺度への
予測効果
第39回生物学的精神医学会、第47回日本神経精神薬理学会、2017年9月28-30日、札幌

篠崎将貴、渡邊 崇、井上義政、有吉顕子、林 有希、加藤和子、黒田仁一、下田和孝
日本人におけるvenlafaxineの薬物動態学的解析
第27回日本臨床精神神経薬理学会、2017年11月2-3日、松江

岩下知磨、宮田 哲、上田幹人、猿渡淳二、青木顕子、西村美紀、土嶺章子、鬼木健太郎、下田和孝、古群
規雄
抗うつ薬パロキセチンの血中濃度と治療効果に関する母集団薬物動態-薬力学解析
第27回日本臨床精神神経薬理学会、2017年11月2-3日、松江

尾関祐二、藤井久彌子、岡安寛明、篠崎隆央、竹内祥貴、秋山一文、功刀 浩、下田和孝
抗精神病薬治療を受けていてQT間隔が延長している症例のKCNH2遺伝子精査
第27回日本臨床精神神経薬理学会、2017年11月2-3日、松江

須貝拓朗、鈴木雄太郎、山崎 學、下田和孝、森 隆夫、尾関祐二、松田ひろし、菅原典夫、古郡規雄、岡本呉賦、
寒河江豊昭、染矢俊幸
アリピプラゾールが血中プロラクチン値に与える影響-単剤および多剤治療群間での比較-
第27回日本臨床精神神経薬理学会、2017年11月2-3日、松江

長谷川千絵、岡安寛明、高村雄太、倉沢和宏、下田和孝
ステロイド治療中にくつ状態とミルタザピンが奏功した皮膚筋炎の1例
第30回日本総合病院精神医学会、2017年11月17-18日、富山

篠崎将貴、岡安寛明、下田和孝
繰り返す緊張病性昏迷に炭酸リチウムが著効した統合失調症の1例
第112回東京精神医学会、2017年11月18日、東京

小西 徹
養女から母親への変容過程
日本心理臨床学会第36回大会、2017年11月18-21日、横浜

渡邊 崇、井上義政、篠崎将貴、林 有希、有吉顕子、加藤和子、黒田仁一、秋山一文、下田和孝
日本人患者を対象としたvenlafaxineとその活性代謝産物の薬動態学的解析
第38回日本臨床薬理学会学術総会、2017年12月7-9日、横浜

<その他の発表・講演>

下田和孝
統合失調症患者の身体リスク
第16回臨床精神医学レクチャーシリーズ、2017年3月16日、福島

下田和孝
抗うつ薬の合理的な使用について
うつ医療セミナー in NAGOYA、2017年10月28日、名古屋

編集後記

初めて編集作業に参加させて頂きました。皆様の文章の、端々に垣間見える個性とユーモアにクスツとしつつ、一足先に原稿を読めるお得感を楽しませて頂きました。個人的に朝のroutineに憧れたため、来年は早起きをする一年にしようと思います。

今回の同門会誌も今からとても楽しみです。どうぞよろしくお願いします。

IS

くう～、疲れましたw！これにて完結です！実は、知らんぷりしたら校閲しろと直接話を持ちかけられたのが始まりでした。本当はやる気などなかったのですが←事を無駄に荒立てるわけには行かないので初めての校閲に挑んでみた所存ですw

O.T

私はこの編集・校正作業に全力を尽くしている。それは、ご多忙のなかご寄稿いただいた大先輩のマグマのような情熱（パッション）を肌で感じる事が出来るからだ。作業は長続き、午前様も少なくなかった。プレッシャーでこみ上げる胃液、そして退役。情熱（パッション）が無い原稿は心に響かないし、読者を感動の渦に巻き込むことも出来ない。しかし、この同門会誌は違う。こんなにも灼熱、素晴らしい珠玉の原稿が揃うなんて、奇跡や僥倖といった容易い言葉で片付けられるものじゃない。あまりの情熱（パッション）には私は幾度と熱傷を受け（注:熱いコーヒーを「パッション」とこぼして）、治療を繰り返している。

あーっ、羽虫がコーヒーに入った！竹内先生の原稿から飛んできたのか（p.14を参照）！

この同門会誌を読んで、感無量の大海原で遭難しても我々は救助できない。唯一無二、絢爛豪華、天衣無縫、乾坤一擲の同門会誌の完成です、ご賞味あれ。

K.Y

平成最後の入局員の一人、Sです。普段サマリーや提出書類などの添削をして頂くことが多いのですが、今回、恐れ多くも同門会誌の編集業務に携わらせて頂きました。これがなかなか大変な作業で、普段お世話になっている事を改めて実感致しました。

ご寄稿いただいた先生方、誠にありがとうございました。

S.Y

今年度、獨協医科大学精神神経科に入局し、日々、自分の未熟さと戦いながら過ごしております。同門会の先生方、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

Y.N

今回、2度目の編集業務に携わらせていただきました。今年も、文章を通して医局の先生方の業務時以外の知られざる一面を垣間見ることができ、大変興味深かったです。

ご寄稿いただいた先生方、ありがとうございました。

K.H

編集に携わり2年目ともなれば、校正の精度が増すかと思いきや、まったく粗漏な校正眼で恥じ入るばかりである。今回の件に関与した校正員（なんだか暴力団みたいな言い回しになった）の諸兄には赤心より多労を謝したいと思います。

S.T

今年度も同門会誌の編集を担当させて頂いた。これまでの同門会誌の編集は、2～3人で静かにやっていたが、今年は、新入局員も増えて、賑やかに行う事が出来た。これからも、医局の歴史として、同門会誌を毎年発行するという伝統を引き継いでいきたい。

興味深く、読み応えのある原稿を書いていただいた同門の先生方に、この場を借りて感謝申し上げます。

S.M

ここ最近ずっと校正を担当させて頂いております。S.M先生と共に最終段階のチェックをしており、共に姑の気概（「ここ間違ってるわよ」と嫁をいびる）で校正をしています。が、姑も歳で御座いまして、気力体力集中力が続かない、世の中の文字は小さ過ぎて読めない！ …そだねー。

メインで編集をご担当して頂きました嫁の皆様方、おつとめ御苦労様です。

本号発刊に際し、ご多忙のなかご寄稿いただいた皆様方へ厚く御礼申し上げます。

F.A

獨協医科大学精神神経医学教室

同門会誌 第10号

	平成31年1月25日発行
編集発行人	獨協医科大学精神神経医学教室同門会
発行所	獨協医科大学精神神経医学教室同門会 獨協医科大学精神神経医学教室内 栃木県下都賀郡壬生町北小林880番地
	TEL 0282-86-1111（代表）
印刷所	㈱松井ピ・テ・オ・印刷 栃木県宇都宮市陽東5丁目9番21号
	TEL 028-662-2511
